

東都波浪



青牛舍
翠古

東西夜話 輓



尤様のとく幸ひ乃友すゆきと後のひくふ
國く乃人のゆゑ東を妨り辨疏乃と遠哉
今日おアソトモアカシムアモ肥は豊には
アリホキニテ尾張みくアモミセテ
伊勢の人々も其前の行りを知りきま
國の人々もアレ彼とぞゆりて多モ木戸
多モ彼より行ひたるをミセテあがく
ちうりおぐれをもん帳アリルも

典故

Digitized by srujanika@gmail.com

— 10 —

水經注

謁先師廟

中行子之子也。子思子者，子游之子也。子思子與子游皆孔子弟子也。

人乃先の主おおよかまれるすをあらまとす
臣侍ノトクルも儀禮もよりんと思ふそり
ソクムツシム人ともよ儀禮の所ふともくま
野狐ノリは野あり無事相乃おのゝあわ
ばれの情漏てお戯とぞもあれハ情漏
ミホ微不へどもあけさゝにすよひてれ取
乃實加不すハいそ才者とりてきくきぢ
む半弓弓内葉ニ射たるすハ星ハ半弓星と
以ハ非をキニ非をつよ星非を擅持アシガト人を
モトシモトサモアモモタケタ此心アモモリテ

紳政の人アヒシマハモトモ承業もあすけ
んをありれミテ後人モモト人乃儀禮をかく出
く出アヒシモト人モト人モテのあよいそ
ウミモアシムコトナリヤの多乃おトモ
モトモモレとはやでなむせられ

彦根

毛老井より例の人アヒシマハモトモ承業圖の
紳政がおわは野うりさきのあり続ひ
さゆゆかまれうわきを一軸モ射ト

萬の事乃ハテニシトモノノ事作
トナリ。而ハテニシトモノノ事作
トナリ。

九月
朝妻

九月事作トモノノ事作
トナリ。而ハテニシトモノノ事作
トナリ。

亨加

九月事作トモノノ事作

九月事作トモノノ事作
トナリ。而ハテニシトモノノ事作
トナリ。

九月事作トモノノ事作

赤坂

九月事作トモノノ事作

九月事作トモノノ事作

九月事作トモノノ事作

山中

九月事作トモノノ事作

すじへ長乃ちつゝはあ／＼鷺舟／＼

さるよも／＼鷺のそひ／＼とおれりそり

とづく／＼四祀よけ給ひもつまむ／＼とお

五羽乃氣もよめ／＼とてつらえり高

蒲乃う／＼とさ／＼もひづをひのよ／＼

も／＼ちとわゆ／＼む

遊やあひあやめぬきとれ陽のあ

夜話

はだ／＼十景あひ先づむ／＼と風の匂ひと

夕歌

か／＼やか／＼や波のトひまし

今宵は桃林亭よけ舟を浮／＼と四か月大よせ
う／＼と魚をあさる行ひなり／＼もきよと／＼ま
よトセ／＼小舟を河原のかえあるす
一勺乃ちつゝ／＼舟を浮／＼とよまけあ／＼む
了船も艘もわれ／＼んぢりせりよ人
よとよとに桃林を以ひと／＼

名録

匂ノほよけでハ若井かくすれ
おそれより秋ノうりうり叶ふ
佐枝も併しま秋のおもくな桃枝
涼亭とよまな葉は晴乾
火の入ゆる窓を宿すて水窓ト
二枝

大聖寺

原み亭

け危ふと圭角をもてあ様の中よき盤あ
枝も立す一ツ友ま乃むハ秋乃童よ笑つ

までもひそれうヰよまえ島のよ二歩も足やめハ
かの湯ぬるぬのよれうさうやあくしん

あくがりてあくやよめも簾は

けあくよあくあわ是とも一里はくわあく
よきもれとよきものゆううを乃入も
人乃立よれへくもくひてあたとせ壁にわ
みもくでゆら芭蕉うト乃り御人びくは富
のあくよあく内させく厚い亭うさき
とすらかくはゆうりうしてやあくひとく
はくとなくうからま

江蘇松

閑居のゆ一は日乃あり一すまきせすて
川舟一格の風を拂すとての月と一里
そくわたらん江上の風も山の月も
ともにやうよきあそひよけくらむる
松葉ちる葉や波立波のも

里揚

旅人アキハル人乞ふタヌミ
何由亭
市中乃日和さざむ去み桜

なす一全昌寺とひよもと先附一被のねと
ひてをもきて生るやま不ち柳也
いづも柳乃あともゆ一すまきれどく
けみくさよまく

ま柳アキハル葉や林もすねわゆ

塙氏のすすりを文いやして、十年あわ
七ゆせ乃か浦をこやたりて頬の毛をひそ
きまほひまくわの嶽乃よるひくと耳
まく山もけあくもちり毛終年もんす

孟亮人（もんりょうじん）もあやしくと酒の一直を借
きうちすぢり

おまえもむかし老乃母（おとおのめ）にまつた

宿詠

今宵は心の病あり先鋒柳固行（さきよしやぎたけ）は涼（すず）
神志丸（しんしつる）とくらば神志丸（しんしつる）大切（だいせき）か秋（あき）ハ行（ゆく）者と
いつれうは跡（あと）う四（よし）一（いっし）除（ぬぐ）すふ（ふ） 實相院
すとづる山伏（さんぶつ）乃り取（とど）もととおさあすなりと
ゑくゑくへ一（いっし）次の夜ある人のまゝの雅（よし）乃

理庵（りあん）よハ此（こゝ）には跡（あと）四（よし）行（ゆく）者不（ふ）理庵
すす門（もん）ハをかわく（くわく）ん乃（の）だらばかわ
きよくハ理庵（りあん）あるの（の）柳固（やぎたけ）の夕（ゆき）を理庵
よつた（よつた）理庵（りあん）すよよの（の）きよくもよよ
ゑくゑくなむとくらばんをすまへ一（いっし）今
匂（にお）すまゆへ一（いっし）今

宿詠

川中（かわなか）て傍（そば）えう袖（そで）むね乃（の）月

名詠

燕も續りうらやにあり新厚み
稻妻や扇うちこほと膝の上
呼よましも群も詠きかねは下
もやれまじまや物のも関雪
鼻絆乃宵半へまひれおさりト
まよふあれぞ一嘯おうすと桂うね 長水
あがまよの面ハ墨ノ一匁の色
世やハセイ一月内傘の下 虎角
直剥もまくら旅野で鶴とも

まくらの毛よるあわいほんやまは 方錐
羽毛とみよち代うや、あ衣
水吉をほアリヤゑの月 里楊
わ壁乃木のうちよえゆるる春事
喰きうふ井えの木かや白牡丹 何由
苗代を股三毛ほさかまくら 交々

手水川

手水川、小玉オ一の難本ナシテモ足向
一里もうちもあり川上ハ峯モハキモニシテ

西の山の下に川下川下へああ移ては
アとよちう一今、山林のそな付ての川
流すとよちう一山林が本山あるよも壁で被
大井川力川部の富士みを人見る所は
壁すとよちう月のそな付ては
まめものアとよちう月のそな付ては
又くしてそな付ては
肩の山やその宿もあらはす
大井川

金口

馬水亭

まえを移け川かや東と月
はたよ東源乃ぬありては
よオ川力川下よも壁で被
やる

馬青亭

まえをよもねそ棕乃旅者

馬青亭

馬青亭よもねそ棕乃旅者

かまち亭

け亭へも一晝夜の一宵二夜乃至し森
やま林へはお宿のをめ一泊より何の面影を
あーふかの氣り事もけあづらばほして
高乃あす一泊もあとがなきわゆうをひき
さとあるもわたりきこなへて一村併まと
をうける中野のふくよ涼へお教へたはる
玉あくまとハぬよりあらん
より井の水をくまく森まで駄のま

金子

己未亭

村ゐ乃き下やあてて荒れ地

・任之亭

おれすうよ渾るぬれむあよき
をきげや森のよすとかまはま

万木亭

け亭ヨ先附竹乃置賛あり致テ至日め

付来よりけびりてあく一はまくよくあ
よみもゆりくスケねおあふ例の立て

人月で行乃たまく竹行の月

八紫號

紫乃老れをとれをまのむ

寅をと亭

世乃ゆうてえきよゆゑみ

徑吾亭

夕晴乃ニシヤモ色モ死のモ

桐之亭

あ窮どんやまくや背戸の店

け亭のほ亭清翠川の川をよはあすてあみ
る乃月のもさりくわ朝をとまうア

仰ろはタケトナモ琴のきみゆくまう体
あさとのまみゆくらやあもむ案ふ乃お鷺の
志のよしやあくしんを奥——ぬいとあ乃
ゆうよきくらむあらま神

琴乃音とのまハ石舟の因縁

秋の病身

ちつまにたくて腰も扇

木枕

ちう秋の病やみ案乃秋の世のねくえま
私病なうえ病をいとくうけよりゆく

又りうへゆゑもしくのふるあひて被毛一ね
たまゆるのもむうノ細麿の幻信をも一衣の
着をむきしーうきの夜も——ほよ二
やましにやくニーやましにせ事迅速乃一弓
をあみて生糸も絲麻也すおうちをヤマサリ
今は某處すおれーんすまゆ合とあはぬ物の
お仕くはる、あひの日乃改りもけりくか
便りするこそあやーくたよとされ家又やう
奉りてあそもとたうりおこまゆとよすよ
みるやあそびとせこ乃くもヨリハキニ也

秋之房日伽諾ハミタキナシハリ日ニモヘテ
原不るくよさうかがくとまくせ情すゑて人の
巣よう御うひあーるなまよ大世の川流な
一せきもとまくまくとまくんととは御をよ
もあくハシムクナリ御をもとくいはすはあくよ
アハハハハハハハハハハハハハハハハハ
とさだあやも榜うてとまくせ情のうきふる
アヒ伽諾のうきーさ体はもとまくしや

丸あら川三子

足利もや塵却記

ウタミモ店

此一宿も宿と申すねのれ

れゆ亭)

肩まぬのいともあつて日々周ふ
あくへ待て日はう不揆授たわ仕友魚奈の
をもんをもん肩まぬのいともなうんとそぞ
れかわらうれとは御日進すとあつやむ
角一をもくに取ひぬ乃よせんたるやう
位もな乃せよはまうれてもがくあさやーと
おりへも天よがわほのまよはぬれをねまむ

良臣とよおの差も強あくとも身を山野よも
らすきよみとよもん中よひともんの拂きがふ
あくへせ乃高きとそちくきとくん乃よ
さくしよりよ、拂きがわあくへせきてはそくやの
れ難今もうつてゐてやうれかえさむ
つとも

（此上）

かきへや扇ふ風ひい襟の聲

林陰亭 良臣アリ

その紙の扇へや扇ひい襟の聲

或日廬主院をさきし被てたまうの家敷
えよりきるしおもはほのうよ人があ
れかふりあらへてあたとゆくよもすりあ
りぬり一の衝門せうくらの外て金屏乃ひ
ア遠き人をしてはなからあくわをばゆ
ましの寐のやまとあつてまづは櫻下乃
差ひさす木柱のキホーにはまざるや
鼓の色をたゞくや板の音もよ葉がめら
まごくとねの音よほよかの幽照ウニカ乃
大い路もじ女片鳴のうむすへまづとま

よあかくよ後隠乃、袖けうへてすよくとい
りきむかみひ日乃能事まくねなまく
そありきる

ね衣やその着させたれの桜

歌謡

煙けよや湯一覺アラ美乃も

歌謡

作業ふかくあつやうる換

器別

香う匂う木の盆乃が被れ

所取不りありを憲トぬさむて
済むかとあひ（ア）リ

今宵はて口せとの佛説は公を計らひめどり
ありせうくはばまわとおもひかまく無事なる
あまへあまギ一傳エ不すまう時をそこよゆる
人されうにかまておほじゆかく信ハシムを已
被ハあゆふあくちわからく徴細のふとあき
附ウ五毛のあくちわと見えなまくしてすくや
ヨリキテモシタラモ一生佛説乃徴味ア

アリは未だ坊ある時
ハシケがハジのあくよ麻より
群まみてかく神もあく傳さうれ
かく附まく人を俯仰長短起伏のさう會
あり乃まをそしササシヤ

附方論

せの人能倍よチ跡をくすりハ附方み変化を
あくまも在也もう乃とふくはまくするよ
あくし今お能倍がチ跡ういてくすり
附方變化もわれて一々くの変化たま

お詫乃くまきよふの附るおとせみ附む
とつゝへなりをチ詫乃第をかへて一々よせ
うも十らもあくべーもの附ん一のひよす
がまくまくとけのうむおれ も第なりを
とハセコよあう附りをさりて

○今日もは世の附達をさり

其人

ほくこと本松のやせまへゆき
其第

湯あわみ草屋よちよよ草のむ

天わ

詫乃くまきよふの附るおとせみ附む

内省

内松の音も教ノヨ年ノテ被申

内直

六月詫乃くま農事くも株子れて

はが詫おはうすとよ附方もあれとけあう
詫おはうすとよ附方もあれとけあう
うす西氣をはれとよすわらも内方

まは一の曲なり

軍書ノ通氣

さ 捕うちまされをとりひきもみて

あ終ノ通氣

入石も松下はせとえむけー

魚ノ通氣

茅とねすようしのみ信りゆす
門林もうい附とくすのもあくす
乞ホハ一毛の固ニタヨミヘモ
あへ元乃食くゆるアモサアモタク

名録

かうき三休テテはゞやまう乃る
柳乃きのかよや玉稻井本もく
鷹羽火よ燃てはゞくの聲れ 少校
あをきをちくークでヤシム萬
美ーう絆きしはゞく 桂ノ木 万子
秋凡 や稻もかく 稲ふ入
傘お乃そのらまともあ葉ト 雪
ケノほのきく家あわ根とも
部あくよけの奉きや相のを

まごとより少原涼——森白山牧童
役に約するをかししまさき
乞食となくハ茶食会ひを喜陽ト
不仕合よほすくちの島うみ 魚素
極手手をなぞりてから承屋の月
そくまな新ハシをわざと群上焉
葉の音や小菜臺乃生が付 鳥小
木の下の周をさうともほくにあは
管も第ハシキアリモホクノれ 小喜
鷺もまた至るの速や蓮の意

ああや柔も極く一病てもす 拍之
ね乃手の子ゆいとそく山喜ふ
ふ川やよまぶめれと流きり
をえいそはまソ絶勢因の格 徒若
蝶もまた一毛をきのよきの花
疊つよわくはぬには妙不
約手アリラシテのものとす 已未
押合て觸よすやまづなせば
瘡入ても善よ高ケレ因ノレ 秋房

菜乃條のほくをとまけとゑ夜ト
葉の色をかすや唐乃おの條 八葉
白鶴よりよまきさ十鶴ト
掌もと色のをやま叶お葉のト 長繒
垂君乃たにさゆりうわ叶防ミ
鶴の距にうねや桃の毛 巴堂
タ川や流リてあま 汗拭ヘ
振の毛ちおのうつりや籬の袖 南里
葛青屋なまく朝をあひうき
毛子ヤ鶴よまくも書ねお葉此山

木刀を簾乃ぼるくりやあみ森
ぬことれ神もあききよくめ 四睡
稻妻乃りり才を一いの竹簾
旅人までうめまで常ぬらう簾 野棠
足し袖て火薙き川わる火爐ト
足見一こちもどくほるおうわく 文砌
何よやうから袖て三面川ある
さやぬうち松よーつじあいさて 三通
白し竹体あいされ十枚ある
赤席ア草蓆もはれておう袖候 唐月

きつまひすまも カ猪川
ねうじてともかくサ林 もと 和木
部、いわ財子アテミルノ様ノハ
萬葉下様アリハシタカセテ、直木
火の伴刀源をとさむれの日
梅う春小わやの木が唐木
般計ア陰ハモウケトスル
竹子アモウ帰とは、おも
木は津少ちうアヤハ体ひ
葉のかも体の髪アヨウヒ志童

神セムスカホ燃 神苏子
ト女カホカホハスケルズ御姓下 林院
キムバニ吉田根牛乃細代枕
茶室ハシムラモアツメの町や木石
サネ乃先モクク松繩乃四ツ小社着
白角竹國の張道 小の底元傷
山東解禁体アシテ和的沙翁 賴元
条モシシ子の肌ナリイヌ谷毛石
まちゆく宿人シガリア付和風
法アシテ紙リナはシヌシ舟 軽舟

ほりと夕をはるゝ一葉きや 意程

とあすよとくちたゞとひ中ト 玉枝

被まつて株ゑのあやまづら 和友

詠次ト駆体もくろも生一付も 新故

一月よまよの序を乃木のま木 八十
やまほげてぬめ歸也縁の夢 宇路

石動

宿観もむ

蝶乃羽も暮れ秋乃月細一

は地の連元教もナ秋もけ今
一葉すやさむニ度すやさうじ
とゆをみて

風出そえどや一度秋あくまね
全心房の秘菴の寒りとく
あやかうりとも毛がるゝや
一葉はいの風乃涼りわざく

一人に深む室あや誰りあ

温故亭

老星堂乃なふ一仕友のいとあなき身

は雅の財 さも又も神をうけ自みか

きもまたああてまちおのまとおゆき

小糸乃あくアシムシヨリモ乃相のニホヌキ

コトナリテ日付トモトハリルナリモ

子孫も接よかニ乃ナリトモトモトモトモ

相乃木のんよちり おのめ

恐々亭

けある。瘧也アノ疾中モハ統御於
ミナヒテ亦モ傷ウリ脚をモニシテ
モ彼ノレニシテモ歎ノ

ねちも瘧とちうそ一在うも
親を奇裏り

六月ヨヒヤトスノミテ 魁

あく人の口ヲタキヒシコトヲトキ
ロヒシコトツバカシモアリ。まや
トリノ内ハモリラクシヒト清ム
ヒサシハ和波也

諸植生八幅

は年ろもそのまよおる乃新火とあ
て火消の本房。始也被毛本房
余毛本房也傍も一時乃新火ア

かのうの風一葉乃風淮の水をかづく
風の風は風の風かの風かの風
風の風かの風かの風

葉の

白船乃赤水の源一叶の水

深子乃赤櫻乃水

赤の賀乃

葉の行深山の行が
行古事記け和乃の風

深子乃赤櫻乃水

赤の賀乃水

深子乃

深子乃赤櫻乃水

赤の賀乃

深子乃赤櫻乃水
赤の賀乃水
深子乃赤櫻乃水
赤の賀乃水
深子乃赤櫻乃水
赤の賀乃水
叶の風かの風かの風かの風

アヘニハシミカサキタムテアモテ
トテ拉モテセトモスミナムシムヒタ
アナラリシキモトウニシテ書乃月トはヘ清ニ
付至跡前ノレト様ニル流ナムセハ俗
ニおちやまく附クミテ秋ハ酒色ムヤム
アムハミトクアムヒタセヨ時ヨ自
在乃ミシテ是ホチハ御トナリテア
コテノ半至オトヒノハキシケ乃引リモチ
カヒキニモ化モ一ニモヒテの本情ア
アキモキシロの御ナリトお御サヘ

アツハ室トテ生アタハノハキナヒミト

アシナシ
アムサ乃お教寿モヒキの

アシナシ
東モ坊

今宵モ國より角双妻吳門口人シマウマ
象モ猪津シシカテちまわモ一房モ室
モモアカハヌモシムヒトモアシマク
口キモキハモ角道ラホム三度

200
The following is a list of the
various species of plants found
in the forest of the
Mormon River, Idaho.
The list is as follows:
1. *Populus tremuloides*
2. *Salix nigra*
3. *Salix alba*
4. *Salix discolor*
5. *Salix interior*
6. *Salix cordata*
7. *Salix glauca*
8. *Salix lucida*
9. *Salix nigra*
10. *Salix petiolaris*
11. *Salix pumila*
12. *Salix pulchra*
13. *Salix scouleriana*
14. *Salix sericea*
15. *Salix taxifolia*
16. *Salix tristis*
17. *Salix viminalis*
18. *Salix vitellina*
19. *Salix* sp.
20. *Populus tremuloides*
21. *Populus tremuloides*
22. *Populus tremuloides*
23. *Populus tremuloides*
24. *Populus tremuloides*
25. *Populus tremuloides*
26. *Populus tremuloides*
27. *Populus tremuloides*
28. *Populus tremuloides*
29. *Populus tremuloides*
30. *Populus tremuloides*
31. *Populus tremuloides*
32. *Populus tremuloides*
33. *Populus tremuloides*
34. *Populus tremuloides*
35. *Populus tremuloides*
36. *Populus tremuloides*
37. *Populus tremuloides*
38. *Populus tremuloides*
39. *Populus tremuloides*
40. *Populus tremuloides*
41. *Populus tremuloides*
42. *Populus tremuloides*
43. *Populus tremuloides*
44. *Populus tremuloides*
45. *Populus tremuloides*
46. *Populus tremuloides*
47. *Populus tremuloides*
48. *Populus tremuloides*
49. *Populus tremuloides*
50. *Populus tremuloides*
51. *Populus tremuloides*
52. *Populus tremuloides*
53. *Populus tremuloides*
54. *Populus tremuloides*
55. *Populus tremuloides*
56. *Populus tremuloides*
57. *Populus tremuloides*
58. *Populus tremuloides*
59. *Populus tremuloides*
60. *Populus tremuloides*
61. *Populus tremuloides*
62. *Populus tremuloides*
63. *Populus tremuloides*
64. *Populus tremuloides*
65. *Populus tremuloides*
66. *Populus tremuloides*
67. *Populus tremuloides*
68. *Populus tremuloides*
69. *Populus tremuloides*
70. *Populus tremuloides*
71. *Populus tremuloides*
72. *Populus tremuloides*
73. *Populus tremuloides*
74. *Populus tremuloides*
75. *Populus tremuloides*
76. *Populus tremuloides*
77. *Populus tremuloides*
78. *Populus tremuloides*
79. *Populus tremuloides*
80. *Populus tremuloides*
81. *Populus tremuloides*
82. *Populus tremuloides*
83. *Populus tremuloides*
84. *Populus tremuloides*
85. *Populus tremuloides*
86. *Populus tremuloides*
87. *Populus tremuloides*
88. *Populus tremuloides*
89. *Populus tremuloides*
90. *Populus tremuloides*
91. *Populus tremuloides*
92. *Populus tremuloides*
93. *Populus tremuloides*
94. *Populus tremuloides*
95. *Populus tremuloides*
96. *Populus tremuloides*
97. *Populus tremuloides*
98. *Populus tremuloides*
99. *Populus tremuloides*
100. *Populus tremuloides*
101. *Populus tremuloides*
102. *Populus tremuloides*
103. *Populus tremuloides*
104. *Populus tremuloides*
105. *Populus tremuloides*
106. *Populus tremuloides*
107. *Populus tremuloides*
108. *Populus tremuloides*
109. *Populus tremuloides*
110. *Populus tremuloides*
111. *Populus tremuloides*
112. *Populus tremuloides*
113. *Populus tremuloides*
114. *Populus tremuloides*
115. *Populus tremuloides*
116. *Populus tremuloides*
117. *Populus tremuloides*
118. *Populus tremuloides*
119. *Populus tremuloides*
120. *Populus tremuloides*
121. *Populus tremuloides*
122. *Populus tremuloides*
123. *Populus tremuloides*
124. *Populus tremuloides*
125. *Populus tremuloides*
126. *Populus tremuloides*
127. *Populus tremuloides*
128. *Populus tremuloides*
129. *Populus tremuloides*
130. *Populus tremuloides*
131. *Populus tremuloides*
132. *Populus tremuloides*
133. *Populus tremuloides*
134. *Populus tremuloides*
135. *Populus tremuloides*
136. *Populus tremuloides*
137. *Populus tremuloides*
138. *Populus tremuloides*
139. *Populus tremuloides*
140. *Populus tremuloides*
141. *Populus tremuloides*
142. *Populus tremuloides*
143. *Populus tremuloides*
144. *Populus tremuloides*
145. *Populus tremuloides*
146. *Populus tremuloides*
147. *Populus tremuloides*
148. *Populus tremuloides*
149. *Populus tremuloides*
150. *Populus tremuloides*
151. *Populus tremuloides*
152. *Populus tremuloides*
153. *Populus tremuloides*
154. *Populus tremuloides*
155. *Populus tremuloides*
156. *Populus tremuloides*
157. *Populus tremuloides*
158. *Populus tremuloides*
159. *Populus tremuloides*
160. *Populus tremuloides*
161. *Populus tremuloides*
162. *Populus tremuloides*
163. *Populus tremuloides*
164. *Populus tremuloides*
165. *Populus tremuloides*
166. *Populus tremuloides*
167. *Populus tremuloides*
168. *Populus tremuloides*
169. *Populus tremuloides*
170. *Populus tremuloides*
171. *Populus tremuloides*
172. *Populus tremuloides*
173. *Populus tremuloides*
174. *Populus tremuloides*
175. *Populus tremuloides*
176. *Populus tremuloides*
177. *Populus tremuloides*
178. *Populus tremuloides*
179. *Populus tremuloides*
180. *Populus tremuloides*
181. *Populus tremuloides*
182. *Populus tremuloides*
183. *Populus tremuloides*
184. *Populus tremuloides*
185. *Populus tremuloides*
186. *Populus tremuloides*
187. *Populus tremuloides*
188. *Populus tremuloides*
189. *Populus tremuloides*
190. *Populus tremuloides*
191. *Populus tremuloides*
192. *Populus tremuloides*
193. *Populus tremuloides*
194. *Populus tremuloides*
195. *Populus tremuloides*
196. *Populus tremuloides*
197. *Populus tremuloides*
198. *Populus tremuloides*
199. *Populus tremuloides*
200. *Populus tremuloides*

あらわゆるをもかくひれい報すあらはすよけ
又事すもあらす一ほのへあるまろもと
きりかとくらむし業すもととあ夜までを
乃トウテあらへてのれ合せをニ珠珠
あらとまくそめをあ業すもととあはれ合
ともあらうよせ家のちとあらまくあれもと
うらじて業すもととととあらまく
て附うも一言もあらよりぬすす
ツヨー志うるよせのくわ附うがをあらわとのこ
うじてお化さるやせてうそじうれ一たがれ

まかねくなまけあらきハ蕉の扇骨也

名錦

精和乃あら彼ハせ乃不苦アレ 謂吹

舟乃帆を中へ通トテま國ト

六月の東にくらむ壁山ト

積きもに業すもあら一翁の

小吉世のかよひと萬一之彼ハ

故庵はくねうてもほせのむう彼ト

まくらや寝よからぬもかく子 温故

玉棚や袖をひくんで葉うわ

ちひ古様

うほよあくや二をまひテ教えうけ
萬のモテトモをもやう教せめおへ

立白

まそわが坐て玉くわや因のそりま
く家かうれとす御こからじ也一宿箱
風かと乃む物と添はるうあ
彦彦は又羽尾ち一ねりて枯葉かれ
因うけつる化粧のつやも扇折
風のあすやすらぐと扇ふやぬけ
みむき捨てひこどり

笑詫

御さやうれうそまは能はう
往う爲そも每候あれ乃モわら子
常縛とうづくくと云うテ佛下
石乃毛も喰て甚廉のきうわる
りうゆうやれてもやいのそんほ外
川筋よほくよくよらおや小角至極
タクよやまうれうれうれうれうれ
苟代やれよあうねが能ふつひ

足立

方堅

香齋

従古

少佐乃笠也。一ノ門。むりくわ。其文
蓮の事は一物よりよ。藤やう。蠻賜
梅等て梅乃す。匂いやま。廉從
松等を吟す。もとす。もうちのあと。正本
たどり。匂乃は。それ。白松。外。袖孤
は。馬より。きのん。鴉の。森。邦里
く。さう。お。ま。と。一。鴉の。森。可水
翁の。事。四。と。か。と。か。梅。蓑。ト。石案
そり。と。せて。あ。陰。よ。す。し。因。考。ト。一。点
あ。う。り。門。令。を。す。る。事。廉。う。ふ。笑。考

あ。種。跡。よ。も。や。梅。宿。窓。乃。あ。 芦。系。

安乐寺

け。そ。く。天。手。の。よ。乃。葉。剣。と。や。観。世。喜。乃
石。切。う。そ。ゆ。う。そ。わ。き。う。け。里。の。ふ。も。お。所。
と。う。ふ。う。被。を。あ。さ。や。一。け。房。乃。一。夜。お。安
五。を。あ。う。す。一。ま。よ。半。月。の。用。を。や。う。と。よ。下
せ。乃。や。き。を。り。り。こ。安。乐。の。ま。月。

接。通。紫。革。士。乃。か。人。象。絃。け。ち。よ。大。う。て。弦。日。く。よ
あ。き。よ。柳。士。乃。か。人。象。絃。け。ち。よ。大。う。て。弦。日。く。よ

て奇松のまゝ納ムは色も福高乃方ア
おもじくその一黒ハシモあらシ

途中吟

ありと日子ナリシテテモクサ
ヒロカ御ト喜びがつテ井波
山乃月夜ヒト涼一志穂ハ
さやりとれ乃喜きナリ慶の日後
巴ナリゆリト出むト兼
アチャキヤエ一あす志穂ハ今
宵ハはぢよへます宵之

も葉西ヤサ能一

紫乃アシヒヤマノアモ

け巴芋の内、生つまおまよお横もすア能
キナリとくのこハシホアミトナウトシハノアモ
乃ハスル雅トハアミアリとはうめのその
人を以ヒヤアタキ世のあ能もされアミモ也

肩の入勝ツノともにお樫りる

柿士亭

けりナシヤ志穂を産玉金ノモ家ハ考ニ

衣裳はきてあれあふさうせしれり今宵
そほ却うきくい麻乃拂ひたまひく義ハ
トモ内をやうにそねぬくゆる

凡す仰よ家並みはくうの内

小枝文通

け郎をむづへ先拂ふやうりて此駕はばき
とありとも神より圓祿のものに内駕の祿性
をさとが内駕の内凡より駕乃言徳をもれば
トモ内をゆく徳能よおがいなもとづく

志の神とも在性へおよきことへてもへとも
言はては度よあひてあらへ一宇とくはうをぬ
乃くも生をゆくう坐思乃あくまもあくじ
をもじと川も車く車く駕乃オ一なりとは
云ふ車を傍ア了事化き神てむづの宣
意今の虚とちや今の虚にてよもじや
主、又か乃言よかくまじやはまん安私乃
を納ア了事やすまみぬまも圓莉時と
詠焉をこなすまもひやく坐虚宮自在のと

小枝文通

本を傍ア

夜詠

松より叶落誰そとすもれ

お仕事お仕事麻毛よ伽羅とやめ

今宵も匂の漏あわきとく松より叶と
主人を被なうんときじゆふ人乃本妻
もありてはよ高と云ひも行こやまきも
きひやく傾搖乃口送と云ひよしたれともけ白
をほくやん世情乃通不直あわ佻謫とやと
寄ねりきくノ只傾搖乃口送とハくよしげ白
玉身仕舞と云ひ神ハ松乃玉御おまえ夜詠

ほたるさうハお仕事乃きとのお供
先かと引をもひ神と松なうもか此微
細乃凡情を衆知をすノも佻謫よ夫は内
うなぐち世情をもととすくよしげ白

扇別

あをひけふ津出く井波乃方よおみじうせと
つるゆ後のおやむく神とくとさばあじ
さとあるやくやまとうふ林りりあひさうがの
松浦さよひめう狹なうがまくとくとくまく
一まなあくしすりいみれりくのんも

正月の日は物う情なまく

行神を御るる豈のかさりか

右記

駒をすけ肉あつて又や鉢の聲す
白ぬみごとくも運よてる日うな
ゆづけて吹かとあらし鳥乃裏
虚妄傍よそむタノ屋吹志され巴弓
御車や花火とてき牛の舌
木かげりや生湯葉をとりほそ内脚

移の萬葉放みて落毛桜の先 柏士
詠今す膝をキムシや 范 四

秋の聲やだ暮ハ始暮立秋ハ暮
を心辰たゞ古一月是遍

モ枯乃てびや空家乃候名の絶
よし安井三郎ちつよや本強豪 一康

玉童神休之娘一窓の月 逸正
吹き河の粟乃小毛也一二に

里女や是洗ひ河手の舟 竹案

神主や鳥乃あゆむ魚の店
あ木下や寺を立てる陸乃寺
そすくしの山の木廢
篠々を立すじ牛乃服ト角
紅砂子山乃寺立山系乃寺ト一雨

升殿

瑞氣

あそびに植も原ノ一金乃寺

叶原化乃石なめら萩乃寺よとたうて荒山

乃森えむせとへり一寺か原山里乃山寺
山雅乃あらきなまく一山はと山のまがも
ひろひつまは山波山乃寺よと山寺れちく
かの純集乃ねどもすり残へアさて強集
乃島も又すくさくせほせんをじ一もとさり
きれり一ありて以とくやまきゆにあま
ナキうる山雅なきてへりてうけし

路健亭

六月よりお隣あわ秋のモ

胡仲亭

立桑葉於森之え版ノ川ノ木竹

淨車舎

蓮の生むおり一石を也

廿五日

本モ傍る七十年歟母あひてちきの立
月の末より來たりれどとまひ三月を一回よ
うかほ遠き本より雲よりけ雅倉を元
は彦のうみて此日はふかくも桂麻乃值

置乃縁を廻して桂麻乃立之を

をあぐくさく

立アハ乃袖もう詠ひをなす

浪化

是月此日ナリカタア母ノ三日アマウテ母
キサクニミシニ一心一向のを教じナリ次
は立アハ少強乃妻モニセムシナリの生シ也
作立神ノ喜の字乃母ナリ也

立桑葉の苦荷モニヨリモナラニ立考

博ヶ場

十治亭

けぢらぬあくわよかすて姫ふるのうみやう
一うきに人のあひもはふ／＼くよろ川
ナリヤカがよにか／＼まみゆ
たれゆ／＼えまたあわまつり机

不舊亭

け亭／＼けどき／＼入亭／＼まほ階梯二層
をうちよのゆりて林天子川さりやうなよちう
山石もあじらきをしむ起附のキサリシタモ

候とよおね候とよおうを乃也

山之翁也 あや／＼けき／＼被てたり／＼老
はまよ御源を栗揚乃ち森もれすもあて
立はぬりふ細もやくきよ佐とふいふかち
そそりてうれし育玉ひ禮はしよ情よも
おなごハ山西川を金戸の里ちく
民家ア松煙も因はくぢまのうよ／＼たる
津よきよ／＼をよかて候 おをあせよ／＼
おれのいはむけあくわまつ／＼

タクホ乃庄れニキアモ地也テ

知足亭

は里を駆くよ須様乃て其もあつて泊幕
乃々入水とす川リ一色の川の御城のこよ
くさりてセタの林も絶えんとおり六七
伊豆もんねどのみ乃くあちと
秋ナリ、梯切る傍トあわくも

老翁

ニシ首不舊亭庵を乃ニ字と呼て曰ゆ

六西ハ此の庄をかくに森のむとも並行とも
五ノ一に乃シトツ時もおち一前船也乃も
ナ船とも底のえきとあされをとめづく
を蒙カ度一とアセ一凡被をりてて此
乃本情を尋かく度狹も長短もあんナ
あくよつてあ情もてまうやせ

また因ナリはくを乃原ウ努

村西ト鶴^{カク}乃葉立叶出ある

あるノはゆく之跡もひよと鶴の葉立叶もな
彼の反のすニヨリヒツヒツト叶す村西とアヌ字

とほりやうれしも村魚ハな般ト用ひまつりて
季のえすナースカニシテ村魚と號いテ神ミ
松乃おさめあうナス。此おハ一庄一奥の山
ゆゑてもあくこのもすナモタナカニモヒ

名録

休ミ萬ヤ一斤ツ神テムタク。不舊
事ゆツヘ移乃皆モウヤ一布箱
志ツ袖アリ柳ヤル乃尾モチ。十治
敷ム。又背ひシ。一さく。麻
亥蟹テ松乃おさまの袖ニモ外。如空

柳。清ヤ夕日。のく。魚。水
馬。よ。セ。ム。大。の。お。ほ。る。本。神。カ。ト。 ハ
ハ。の。く。。と。ツ。メ。モ。イ。テ。ス。ネ。ウ。施。ト
経。矢。玉。首。角。あ。る。白。さ。ク。レ。 玄。譽
槿。乃。も。も。き。血。氣。乃。ヌ。男。若。ト
経。目。絆。ヒ。は。神。テ。 水。の。柳。リ。 和。矣
月。曉。よ。尾。是。ヨ。シ。ウ。房。ウ。ム
烟。柳。や。藤。ア。ク。春。花。乃。店。 神。堂
山。川。や。木。ヤ。と。ス。ナ。村。魚。魚
市。人。う。洋。ヤ。乃。カ。休。ト。ヨ。ヒ。處。ナ

家乃大もてうはくあれあれと云

様人よきとを吸ひる葉擣下 茶信

とんがくべりて鼻あくふた下

名月の傍をめづれや 魁 楠 楠雀

さくとまゐ前りける底葉下 五計

井波

六月也

夏と秋ととすりや 一そなへや ひよ

立秋

一筋乃糸すらかか そなへのね

兼人亭

三日月乃をすまふとハ行のむ

夕北亭

銀屏か夜ヤセタ乃極入

因こ端

は林みほゆどむし流化すをせし袖仕やて
五音とわいの聲をもむ袖もくまぐりし
年はも年少とあくべ内雅も袖ひきあわ
やうくへばはよ岸まのむかしありてその財のつて
まくとゆ水湯もまくとやはくまわらもと

國民やまの屋
おひりやうき
と本やまの屋
市

少ちを水火湯竹林寺一萬石也と義
生もあす筆を清々として被ハ被ハ林立トよ
まくじゆ体もら是を身も上ふあし
多とあくまでも清々として詳了ノ君字
や東む傍見う判志をもんとひすよ以てよ
コト内院通す通して翁をえどる身もも
又ね立すあくう被着外そく内院玉通を
さる林みをもすてまもまも也下トイつ被も
立乃於すありなりうんそげぬ宿ハハナた
まもまもひくぬ山乃君も吹あくをほり也

少
翁もあくうかくハとせのじ一萬石なよ
翁もあくう翁も也一萬石なれ世よに雅の信
あくうそめのねまに御内すおりて右りうよ
人よふくゆきよとももと也も被て凡貌乃んよあく
い乃は雅とおひすよ也
まも筆も筆も筆も筆も筆も筆も

専別

稿（）とそく書はく門の秋
稿（）とそく書はく門の秋

む一強輪々輪轍乃胸力が
もたれり氣すやまうせ
稻葉山御林麻生神が古里
をもひゆきも也

唐紙

流化日二日はの形容も一トもあくまふ
皆よハ廉拘（アシタマ）もえ仕立まほけか二日月と承
密毛もよナ体あらす向てんうは跡う日萩
人亨乃二日月と古今形宣（カモニイシテル）な神をさの
柳りわよくもあらてよまくのう乃等も

あくとよとく事事廉といへ様乃矢と又立
キキヤももな廉拘乃筋と乃う般モ松さうよ
流りの筋（スルシ）とあく人偶造乃形容といふの上
一二日月や草矢をもあこゑぬし
先あく清と世のへがく興と神とやうてモ作
よかう被て凡雅乃空と考へ一

亦曰其の其角り能造（ノリハシ）このはの焦尾琴三上
吟と考るよおとくも唐人乃麻吉子て世
の人乃多くはまくは十句の中一二方よひ一被
もいだんと考るようあくんは妙因そひす

あらそれよくちりぬ先好今後ひ初伴好よ
おうて猿猿義撫一やさかひ被うとす
てみ年乃ほの変化をもじはき其角り彌猿ハ
はさゆーぞくもさ猿ハ書ひりもひのをの
し乃作とのやまとみの生をもふ石のの中二
白猿も作とがまされと世乃くも耳め
あく晝み、猿たかわとりとさるを角之字
乃猿と山花のまめとりすとくわなり先
野猿はきその化るますと長てある六二作
三作よりかよとへ九重力猿すがりておと

お陰す体を引一きることくさんくもせ筋
とあくも並みうつまの耳が聴きる人ハ掌
中乃むと見るよりあ体あきくとましられ
ヒミ猿を一聞乃猿ゆきうてすまのね
を聞乃も一やすら先好曰聞らむるも
少しあのなれして少しがんじて聞ら
もととくの氣度とあくと一と拂う旅
ふう馬かと志とはねまへしりふるとてくわ
あくと猿づら先ハをのうんアのきくと
はくと馬とよのとあるとあくとまく作も

十九年五月ハコヘテモトヨタキニテ下の筆志
と名セテモテ馬キトヨリニ石子乃船を附
くもともと船ハモテ御クルムトヨリあれど
之を教にシテはあくしん教のものなれば、おう
んぢる事やとおほりておほくもは（）の變化
せらるやか事を筆（）筆やとしまと
筆をとくく候船宿ハ乞く变化力（）をりて變
化とくまく船宿乃新古より是（）にな
西美秋集乃附方トは宜ヒテテアリ仕事れり
思ハシミテよき一あくわちる財を在船ハシミ

モツキトヨ名前ナリトケ日ヒタス日乃
直義の筆（）

天祐乃日を連う跡の筆（）

ムク母とそめあつて月

是ホリウトは宣トモリツイ一走一具の氣

書ナシ被ヒカクハねひおき（）

名録

考セテモトトナリヤ本乃言浪化

山脚や本はりより草のちば

五所や附あまらとあ秋乃上

五所や附あまらとあ秋乃上

印のひやぢうひとある大の傷

林江

病ちりほりも坐まじま車凡
宿さへ一もれぬよお乞ノ佛

涼一またまわゆどハナリシ

路健

稻書あり筆とせりばく筆事不

在う事やをト教アハ隣玉曾呂凡

手拭も勤く小内やあらのを

持持ひあとトあヨミをさる

元吉

猪アモテおやかみの食えりあ

一村乃ニアミタリヒヤ田牛モモ

吏全

折筆すねも神くや暮アリ

藝人

省き下の唐もほくああトサト

一さらく高唐乃壁アリ天氣ア

胡仲

穀房の阿瓦ヨケトマホとモ

タ兆



